令和５年度　倉敷市立短期大学　専攻科（服飾美術専攻）
入学試験（二次募集）
小論文問題

受験番号

次の文章は、アンソニー・サリヴァン　著（原山都和丹　訳）「カール・マルクス　ファッションと資本主義」からの抜粋である。文章をよく読んで、問いに答えなさい。

「万人のためのファッション」を生産し、消費する？

もし私たちが資本主義下におけるファッションの物質的側面に、より厳密に言えば、資本主義下で衣服がどのように生産されそして消費されているのかに目を移すなら、その全体像は、重要であるものの不均等で矛盾した、封建的な生産様式からの転換だと見ることができる。動きの遅いこのシステムのもとで、個人または小規模な職人的商品供給が一世を風靡（ふうび）した。布地や衣服の製造は、店を基盤とする仕立屋、熟練の職人、針子やドレスメーカーを巻き込んだ「家内工業」であった。このことと、今日の小売り商品としてのファッションの大規模生産――「プレタポルテ」や世界的ファッションチェーンで手に入る出来合いの衣服――とは顕著な対象をなすと同時に、重要な点で誤解を招いている。

①現代は急速に変化する「ファストファッション」の時代だ。最新のセレブリティやファッションショーのスタイルにみられる魅力的なイメージが、インターネットやソーシャルメディアを通じて一気に広まるやいなや、それらはすぐに多数の世界的ファッションチェーンストアによってピックアップされ、今日の消費者に売るための既製服に変わる。デザイン、在庫管理、販売、物流のプロセスにおいてザラが採用したデジタルテクノロジーは、流行を見極めてからその商品が店頭に並ぶまでにかかる時間をたった数週間にまで削減している。しかし、つい最近の1950年代中頃では、「自分で服を作ったり、あるいは誰かに作ってもらったりすることがまだ普通に行われていた」。驚くことに、19世紀末から20世紀初頭にかけてブルジョワジーから始まったファッションが、その後中流階級へと広まっていったにもかかわらず、封建主義が広く終焉（しゅうえん）を迎えたしばらく後も大部分の人々にとっては非流行的な消費のパターンが残っていた。エコロジーの観点からみると有害な今日の使い捨てファッションの文化とは異なり、18世紀や19世紀においては布地が補修され、糸をほどかれ、きれいにクリーニングされ、セカンドハンド、つまり二度だけでなく、三度、四度、五度、六度、そしてそれ以上も再利用され、可能な限り長持ちさせられた。さらに言えば、20世紀初頭にいたるまで古着取引は、中流階級、ブルジョワジー、貴族階級を除くすべての人たちに向けて既製服を入手する方法を提供していた。

資本主義時代初期におけるファッションという文化の出現と普及の間には矛盾があり、ファッションがまぎれも無く「万人のためのファッション」となる20世紀後半まで、大多数の労働者階級は既製服の流行から排除されていた。これは基本的には新品の既製服の価格の問題であった。あるタイピストは「1910年は1年に約66ポンド」稼いだなかからおよそ「年5ポンド」を衣服費にあてたが、それでは流行の服を着る余裕はなく、たんに「きちんとした」格好にしかならなかった。マルクスとエンゲルスは『宣言』において、「生産力」という潜在的生産性は、豊かであったはずの時代のなかに欠乏状態を作り出した、階級を基盤とする資本主義の社会関係によって制限もしくは「束縛された」と主張する。この主張はファッションの事例にぴったり当てはまる。19世紀末から20世紀初頭に労働組合が立ち上がるまで、先進国では賃金上昇

受験番号

が余儀なくされ、ファッションは大多数の労働者階級の懐を大きく越えていた。ここでファッションは、様式の陳腐化の急速なサイクルというバルト的な意味において理解される。そこでは、「交替〔の速度〕が荒廃を超えている」のである。この排他的な消費の歴史は、CMT（「Cut, Make and Trim」の略で裁断、縫製、検品からなる一連の作業を指す）として知られる古めかしい組立工程を中心に据えたままであるため産業革命前の起源から逃れることができずにいるファッション生産の現実とよく似ている。事実、CMT は 170 年前のミシンの発明以来ほとんど変わらないテクノロジーと技法を使用している。

労働、「類的存在」、そして装飾品の二重性

前述の通り、資本主義は資本家による労働者の搾取に基づいたシステムであるとマルクスは主張した。彼が「剰余価値」と呼んだものを引き出すためにこの搾取がどのように機能しているのかを理解することは、②ファッションの生産と消費とのあいだにある矛盾を理解するための一助となる。より具体的には、なぜ 21 世紀のファッションが、私たちのほとんどが今日着ている衣服を生産する衣料業界の労働者の労働を激しく搾取し続けているのかを説明することができる。マルクスの時代の衣料業界の労働者が堪え忍んだ、低賃金労働のぞっとするような状況とほとんど変わらない苦労が今なお存続する。なぜならファッションが大量消費現象としてあり続けるためには、安く作られ、売られなければならないからである。

マルクスの「類的存在」としての労働の概念は、ファッションを理解するために不可欠だ。ひとつ例を挙げるとすれば、綿花の収穫から小売店のディスプレイまで、40 以上の製造行程のそれぞれに関連する社会的労働なしでは、男性服の定番商品である既製のチノパンは存続できないだろう。研究者のなかには、マルクスの労働者に対する注目はあまりに雑な唯物論だと考える者もいる。つまりマルクスの生産に対する注目は視野が狭く、製品がいくばくかの機能性を持っていさえすれば、美的な側面や品質に頓着していないというのである。悪名高い車である東ドイツのトラバントや、均質化のための制服である中国の人民服などが「共産主義」によって生産されたという事実によって、この誤解は増大されてきた。なぜこれらの国家がそのような「不可思議なこと」をすることになったのか、その理由をここで述べるにはあまりにも複雑であるが、これらの事例が両国において労働者による管理や民主主義の欠乏、または疎外を証明していること、そして各国家がとった行動は共産主義というよりはむしろ「国家資本主義」であったことは指摘できるだろう。そのようなものはマルクスにとって嫌悪すべき対象であった。というのも、彼は国家の所有権や利潤を求める原動力ではなく、労働者の民主的な労働管理や人々の欲求や必要に役立つことをめざして議論を続けたからである。

出典：アニェス・ロカモラ＆アネケ・スメリク　編（蘆田裕史　監訳）『ファッションと哲学　16 人の思想家から学ぶファッション論入門』，フィルムアート社，pp. 58-61，2018

令和５年度　倉敷市立短期大学　専攻科（服飾美術専攻）
入学試験（二次募集）
小論文問題

受験番号

問１．下線部①「現代は急速に変化する「ファストファッション」の時代だ」について、100字以内で説明しなさい。

問２．下線部②「ファッションの生産と消費とのあいだにある矛盾」を解消するためにはどのようにすべきか、あなた自身の考えを600字以内で自由に述べなさい。